

# 日本学の旅（II）<sup>1</sup>

## — 日仏交流の強化と充実化 —

ロール・シュワルツ＝アレナレス

2008年1月14日と15日の2日間にわたり、ディドロ・パリ第7大学 (Université Diderot Paris VII) 及びコレージュ・ド・フランス (Collège de France) において、フランス国立高等研究院 (Ecole Pratique des Hautes Etudes) も参加して行われた日本学の共同ゼミのコーディネーターとして、その意義、特色、そしてその成果を簡単に振り返りたいと思う。この研究滞在は、お茶の水女子大学にとってフランスとの学術交流の発展のための重要な一段階となった。大学院生の研究を助成するために設けられた二つのプログラム<sup>2</sup>の助成金を受けたこの日仏共同ゼミは、2004年の創設以来お茶の水女子大学比較日本学研究センターが行ってきた活動の延長線に位置するものであると同時に、日本学という分野を越え、国際的な大学間協力の新しい展望を開くものとなった。

### 1. 意義と目的

#### 1) 学術交流の継続と強化

お茶の水女子大学比較日本学研究センターは2006年3月パリにおいて<sup>3</sup>、コレージュ・ド・フランスの「中国・日本・チベット文明研究センター (Centre de recherche sur les civilisations Chinoise, Japonaise et Tibétaine du Collège de France UMR 8155)<sup>4</sup>と共同で初めてシンポジウムを開催した。この研究センターにはパリ第7大学の教員や研究者、大学院生も所属し、日本学の分野でとりわけ名高いこの二つの研究機関、大学との間に結ばれた関係は、その後講演会、シンポジウムや共同研究といった枠組みの中で多くの実り多い交流を生むこととなった。

お茶の水女子大学からは比較日本学研究センター所属の教員3名、研究者2名、大学院生5名の計10名が参加したこの共同ゼミは、フランスの日本学研究者らに本校の国際性を示しつつ、これまで行ってきた先駆的活動を継続していくことが目的の一つであった。今回の共同ゼミにより、2年前のシンポジウムから始まった対話はより掘り下げられ豊かなものとなり、また同時に相互の知を広げる結果となった。パリ第7大学日本研究グループ (GREJA) 責任者でありゼミ初

日の共同主催者であるアニック・ホリウチ氏 Annick Horiuchi、ダニエル・ストリューヴ氏 Daniel Struve (日本文学、パリ第7大学)、セキコ・プチマンジャン＝マツザキ氏 Sekiko Petitmengin-Matsuzaki (コレージュ・ド・フランス図書館) といった、これまですでに定期的な交流を行ってきた研究者ら、またセル・サカイ氏 Cécile Sakai (近代文学、パリ第7大学)、ミシェル・ヴィエイヤール＝バロン氏 Michel Vieillard Baron (古典詩、INALCO)、シャルロット・フォン・ヴェアシュア氏 Charlotte Von Verschuer (古代史、国立高等研究院)、アルノー・プロトン氏 Arnaud Brotons (歴史・宗教、INALCO)、エステル・レジェリー＝ボエール氏 Estelle Leggeri-Bauer (美術史、INALCO) といった他の日本学者らにも、2日間で行われたセミナー、見学、懇親会などの活動に参加していただいた。また、コレージュ・ド・フランス中国・日本・チベット文明研究センターのメンバーでもあるシャルロット・フォン・ヴェアシュア氏には、現在氏が率いておられる日本の農業技術及び食料品の比較史研究グループのある国立高等研究院の活動の一環としてゼミ2日目を合同でコーディネートしていただき、これにより、今後本校と関わりあう研究機関とのネットワークを拡大できただけでなく、現在日本と同様にフランスでも大きな関心を集めている食料品というテーマについての共同研究の可能性を探る機会ともなった。

#### 2) 共同ゼミによるパリ第7大学との大学間協定の締結

そして、おそらくここに今回の共同ゼミの最も重要な意義があるのだが、本校比較日本学研究センターとパリ大7大学東洋言語・文明セクション (UFR LCAO) はこの2日間の共同ゼミの合同主催を通して、それまで数ヶ月間かけて準備を行ってきた大学間協定の始動に期待を寄せていた。今回の協定の立役者の一人であったアニック・ホリウチ氏がフランス側の中心となってコーディネートされた1月14日のゼミは実際、こうした相互交流の一環として企画された初めての共同ゼミであった。このゼミは、パリ第7大学の真新しい新校舎で行われた (ジュスイウ・キャンパスにあつ

た元の場所は手狭になり、数ヶ月前にセーヌ川沿いの旧複合商業施設、グラン・ムーランの跡地、フランソワ・ミッテラン国立図書館に程近い場所に移転した。

## II. 共同ゼミの特色

今回の共同ゼミの意義でもある「交流の強化と革新」という目標から、ゼミの内容とそこで取り上げられた方法論、そして今回のパリ滞在の構成全体にも、いくつかのはっきりとした特色と方針が打ち出された。

### 1) 初めての共同ゼミ：日本語による超域的研究発表／比較研究

今年お茶の水女子大学とパリ第7大学で締結された協定文書にも記されているように、学生の移動や情報の交換を促進させる長期的交流を目指し、今回この2大学は2006年3月に行ったようなシンポジウムという形ではなく、「ワークショップ」のような形態の研究発表や討論会を構想した。これは10名の学生及び若い研究者（本校から7名、パリ第7大学から3名）が現在行っている、様々な分野（古代史、近代史、日本古典文学、比較文学、日本思想、民族学）の研究発表を主に目的としたものであった。代表的な研究例を挙げることで、今後の協力体制を確立するためにそれぞれの大学のレベル、研究対象、そして研究ツールや方法を互いに紹介することが重要な点であった。

そこで、大学間協定の計画を率先した比較日本学研究センターが柱とする研究方法の一つに倣い、パリ第7大学では主に「比較」を重視する超域的な研究発表が行われた。これは、発表内容から見た「比較」だけでなく、世界中の日本学者らが発展させているような、研究の方向性の「比較」でもあった。この共同ゼミ司会者のアニック・ホリウチ氏、セシル・サカイ氏（パリ第7大学副学長）、そして日本文学の専門家であるダニエル・ストリューヴ氏や多くの学生らの参加は、各々の思考を刺激し、討論を活発化させた。

共同ゼミ2日目は、古瀬奈津子氏、シャルロット・フォン・ヴェアシュア氏が中心となり、2年前のシンポジウムと同様にコレージュ・ド・フランスで行われた。研究者1名、博士課程の学生2名の発表は、いずれも古代史がテーマではあったが、非常に幅広いテーマに触れ、エステル・ポエール氏やミシェル・ヴィエイヤール・バロン氏らフランス人研究者らの関心を大いに引いた。

参加者、聴講者共に「日本学」という領域を超えて行われた2006年のシンポジウムは、二ヶ国語で発表が行われ数居の低いものであったのに対し、1月14日

15日のゼミでは、日本学を学ぶフランス人学生の本校への留学といった、協定締結による将来の交流を見越し、通訳なしの日本語のみで行われた。フランスではこういった例は珍しい。実際、こうして自分の研究を発表する機会をもてるフランス人学生は非常に少なく、たとえあったとしても、彼らの母語で、彼らの概念に従って、そして彼らの自然なリズムで発表を行うのが一般的である。従って今回の試みは、フランス人学生にとって困難ではあったが励みにもなり、またこの共同ゼミを非常に先駆的で有意義なものにした。また一方で、易しい言葉で研究内容を伝えるための日本人学生による準備作業（ゼミの1ヶ月前には発表原稿をフランス人側に提出していた）、そこに払われた努力や彼女らの大きな関心は、双方への貴重な橋渡しとなり、討論を助けるものとなった。最後に、フランス文学教授であり14日のゼミで発表も行った中村俊直氏を始め、比較文学、フランス文学の学生である西岡亜紀氏、砂庭真澄氏といったお茶の水女子大学側のフランス語話者の存在は、この2日間を円滑に進め、これを実り多いものにするに大きく貢献したことも付け加えたい。

### 2) 文化・学術見学

大学院生や若い研究者が短いパリ滞在をできるだけ活用し、大学間協定の締結による今後の交流を考慮し、中村俊直氏、古瀬奈津子氏、そしてフランス側主催者の同意と協力を得て、2年前と同様に、フランス文化を知り、フランスにおける日本学の重要性を理解するための見学会を、滞在4日間の中で行うことにした。

#### a) カルティエ・ラタンからヴェルサイユ宮殿へ ：フランス文化を吸収する4日間

前回同様に、共同ゼミへの参加者は、カルティエ・ラタンの中心にある、書店や出版社の立ち並ぶオデオン座に面した細い通りのホテルに滞在した。リュクサンブール公園、パンテオン、ソルボンヌ大学にも近く、学生らは滞在中ヨーロッパ文化の最も重要な中心地の雰囲気や歴史を存分に味わうことができた。また本校メンバーらは、それぞれの学問的な目的にも呼応する主に4つの見学会に参加する機会を得た。

#### \*ルーブル美術館：ヨーロッパ美術を概観する

学生らは半日をかけて自由にルーブル美術館を見学し、ヨーロッパ美術史を概ね発見あるいは再発見する時間を得た。

\*国立中世美術館（クリュニー美術館）とガロ・ロマン時代の遺構：古の文化を比較する

1843年、中世という時代に熱を上げた一人の美術愛好家、アレクサンドル・デュ・ソムラールのコレクションから創設された国立中世美術館は、カルティエ・ラタンの中心、ガロ・ロマン時代の古代浴場（1～3世紀）とクリュニー修道院（15世紀末）という二つの珍しい遺構の中にある。年月とともに増大したコレクションは今日、ガロ・ロマン時代から16世紀にかけての人々の歴史と美術を概観できる貴重なパノラマを見せてくれるものである。数々の傑作や遺跡の中でも特に名高いタペストリー「貴婦人と一角獣」を所蔵するこの美術館見学によって、文学、哲学、美術における日仏の交流について研究をする4名（中村、シュワルツ、鈴木、西岡）、歴史専門の5名（古瀬、重田、野田、判、矢越）、平安時代の文学の専門家（諸井）らお茶の水女子大学の参加者は、ヨーロッパ古代、中世の歴史や文化について、比較研究的な見方で考えを巡らすことができた。

\*アリーグル市場：フランスの食品文化とその歴史をたどる

ゼミ2日目の共同主催者であり、日本の農業の歴史と食料品に関する専門家であるシャルロット・フォン・ヴェアシュア氏が企画したアリーグル市場見学によって、参加者らはパリの最も活気ある、そして最も異国情緒あふれる界隈を発見することができた。アリーグル市場は、18世紀に高級家具製造やそれに付随する職業に従事する職人を中心に多くの人口を抱えたサンタントワヌ街の胃袋を支えた市場である。見学に際し、フォン・ヴェアシュアは市場の社会史、文化史を解説し、日本の食料品の歴史との興味深い比較も披露してくれた。

\*ヴェルサイユ宮殿：世界遺産の建造物を発見する

中村俊直氏の引率で訪れた、パリの西に位置するフランス王国絶頂期のシンボル、ヴェルサイユ宮殿の見学は、学生らにとって世界で最も有名な歴史的建造物を発見する機会となった。

b) 美術館から教育・研究機関へ

：フランスにおける日本学の歴史と発展を理解する  
何よりも日本学という分野での国際的な交流ネットワークの構築という、今回の共同ゼミの目的、あるいはもっと広く我々比較日本学研究センターの目的に則り、フランスにおける日本学を象徴するいくつかの場

所の見学を企画し、以下の研究施設を訪れた。

\*ギメ美術館：世界屈指の東洋美術館

世界有数のコレクションを誇るギメ美術館の見学では、2001年から全面的に改修された展示室において、参加者らはアジアの様々な芸術的伝統の関連や違いをより理解することができた。また、西洋そして東洋においても比類のない「パンテオン・ブディック（仏教諸尊ギャラリー）」を堪能した。これは、創立者エミール・ギメ（1836-1918）が構想した通りに、別館にギメ美術館オリジナル・コレクションを展示しているものである。ここでは、1876年にギメが日本から持ち帰った、日本の寺院や個人の祭壇などに安置されていた250もの仏像類が、著名な日本学者ベルナル・フランクによって世界にも珍しい仏教図像学の体系に仕立てられて分類され展示されている。そして、1889年の美術館創設当時から存在する図書館にも訪れた。ここには、あらゆる言語で書かれた書物や雑誌が所蔵されており、その数は10万を越え、1500タイトルの定期刊行物が置いてある。また数々の特殊なコレクションの中でも、江戸時代の絵本コレクションが所蔵されている。

\*パリ第7大学キャンパスと図書館

：教育・研究機関のダイナミックな拠点

ゼミ第1日目に、アニック・ホリウチ氏とダニエル・ストリューヴ氏はパリ第7大学の新しいキャンパスにある日本学セクションと中央図書館の見学を企画した。

1971年に創設された同大学は1994年、啓蒙時代に学問の超域性を謳ったドゥニ・ディドロの名を冠し、「知の生成と発信、自由と批判の精神の形成を基本理念とする」と大学規約第1条にも記されている。元々いくつかの場所にキャンパスが振り分けられていたが、2007年10月より、実験科学の教育のみジュスユ・キャンパスに残り、大部分は13区、オーステルリッツ駅の線路とセヌ川に挟まれた再開発中の商業地域にある「パリ左岸キャンパス」に移された。1917年から1921年に建築家ジョルジュ・ウィボ Georges Wybo によって設計された「グラン・ムーラン」は、かつてのパリの産業隆盛期を今に伝える貴重な建築であり、1996年まで毎日1800トンの小麦粉を生産していた。今日、文学、芸術、映画、言語、人文学部と9000㎡の図書館がこの地に入り、3000人の学生を受け入れ、学生食堂や韓国式庭園の中庭も有する。この大学の日本セクションで行われている教育・研究活動の活発さや質の高さに加え、現在国外の提携大学は200を数え、

国内外で定評ある26の研究チーム、2300人の教員、研究者、2300名の博士号準備者を擁し、毎年の入学者27000名の内5000名以上は外国から受け入れているこの研究機関の重要性を、見学者らは実感できたのではないかと思う。

最後に、アニック・ホリウチ氏が企画した、パリ第7大学国際交流室の責任者、マリー・ジー氏との面会には、古瀬氏、中村氏も参加し、非常に有益なひと時であった。同大学へのお茶の水女子大学学生の将来的な留学の形態については具体的な提案があり、協定による交流への関心の高さが伺えた。

\*ソルボンヌ・国立高等研究院とコレージュ・ド・フランス高等日本学研究所図書館：権威ある研究の中心地

1日目のゼミの後、参加者らはフランス国立高等研究院（その一部はソルボンヌ大学内にある）を見学する機会を得、そこでシャルロット・フォン・ヴェアシュア氏による歴史のセミナーに出席することができた。そして同氏とセキコ・ブチマンジャン＝マツザキ氏も同行し、2年前と同様コレージュ・ド・フランスの高等日本学研究所図書館を訪問した。この図書館は現在、日本学研究ではヨーロッパで最も優れた図書館のひとつである。コレージュ・ド・フランス日本文明研究センターの重要な資料源である同図書館は、国文学研究資料館や東京大学史料編纂所といった日本の権威ある研究所と共同で行われている多くの国際的研究計画の対象となるコレクションを有している。現在進行中の共同計画には、例えばベルナルド・フランク・コレクション所蔵の800の「お札」の調査、あるいは17世紀から19世紀にかけて書かれた10,000ほどの手書き原稿を有する甲州三井家旧蔵文書の目録作成、図書館への移管といったアーカイブ化と利用の可能性が挙げられる。その最も古い文書の中には、キリスト教に改宗した甲州地方の住民の戸籍簿（1688年）も見られる。

### Ⅲ. 成果と今後の展望

フランスで最も大きな超域的総合大学の一つであるパリ第7大学の近代的な建物内で行われた1月14日のゼミ、そしてフランスの東洋研究の伝統を引き継ぐコレージュ・ド・フランスとソルボンヌ大学で行われた15日のゼミは、いずれも特に実り多いものとなり、また数々の文化活動や見学会と共に、参加者らに今後の交流や共同研究の展望を開くものであった。今回出

会った多くの研究者の内、アニック・ホリウチ氏、シャルロット・フォン・ヴェアシュア氏、エステル・ポエール氏は、比較日本学研究センターが今年開催する様々な催しに、すでに参加の意を表してくれている。また、パリ第7大学と結ばれた協定は、日本学を専攻する同校のフランス人学生のお茶の水女子大学への留学を可能にするものであり、今回の共同ゼミで始まった対話は、近いうちに継続されることになるだろう。そしてこの協定は、日本学という分野や日仏という関係を越え、ヨーロッパの中心的研究機関であるパリ第7大学で研究を行いたいと希望するお茶の水女子大学の学生や研究者全てに開かれる交流網なのである。

### 注

1. 「日本学の旅（Ⅰ）－日仏間「対話と深化」を振り返って－」 in 『お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育」イニシアティブ（対話と深化）の次世代女性リーダーの育成活動報告書』2006年10月30日発行。「魅力ある大学院教育イニシアティブ」プログラムより助成を受け、比較日本学研究センターは2006年3月24日、25日にパリのコレージュ・ド・フランスにおいて「18世紀～19世紀、江戸から東京へ：都市文化の構築と表象」、29日にクレルモン・フェランにて「哲学・倫理・宗教思想－日本とフランス：交錯する視点－」とそれぞれ題した海外での最初の大きなシンポジウムを開催した。
2. お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム、及び女性リーダー育成プログラム。
3. 注1参照
4. コレージュ・ド・フランスに拠点をもつこの研究センターは、別個であった近接する三つの文化圏に関する既存の3研究チーム（中国文明研究センター、日本文明、チベット言語・文化）を統合したもので、2006年1月1日に発足した。ニコラ・フィエヴェ氏が率いる日本研究チームは、主にCNRS（国立科学研究センター）及びEPHE（高等応用学校）所属の研究者を擁するグループと、GREJA（パリ第7大学の日本研究グループ）のメンバーのグループの二つから構成される。また、フランス極東学院とINALCO（フランス国立東洋語・東洋文化研究院）からも日本学者を受け入れ、このセンターは現在50名の研究者、教員研究者、8名の博士号取得者、57名の博士号取得準備者（中国学20名、日本学27名、チベット学10名）、36名の準会員、そして多くの外国人研究協力者を擁している。ちなみに筆者がニコラ・フィエヴェ氏と共にコーディネートした国際シンポジウム「18世紀～19世紀、江戸から東京へ：都市文化の構築と表象」は、この新しい研究センターで開かれた最初の学会であった。